

固定的なジェンダーによる色分けを押し付けない

トイレの標識（サイン）や温泉の暖簾のように、性別を赤や青といったイメージする色で識別していることが多い。しかし、自分が選ぶ身の回りのものはどうだろう？ 災害時には支援物資の数など様々な制限もあり、子どもたちに必要な文具などが「与えられる」という状況になっており、子どもたちへの必要に応じた「個（パーソナル）」への支援ができていなかった。災害に遭ったことで、失いかけた尊厳を回復するためにも、固定的なジェンダーの色分けを強いられることなく、選ぶ喜びや自分らしくいられることが大切となる。

「男子には黒、女子には赤」？

義援金を利用したものや寄付によるランドセルや文具などの支援物資は、調達時に「男子には黒、女子には赤」などの固定的なジェンダーによる色分けがされ、子どもたちへ配付されていた。

近年ではランドセルも安全性能の強化に加え、色や素材、デザインに至るまで選択肢が多様化している。平時では子どもたちは個性や嗜好に合った「自分のもの」を選ぶことができた。が、災害に遭ったことで、固定的なジェンダーの色分けを強いられ、「与えられる」という状況になっていた。

好きなものを選ぶ楽しみ

ある団体では、文房具などの用具入れの購入を要請された際に、平時のように子どもたちに選んでもらえるよう黒や赤以外の色も手配した。その際、物資の送り手や調達担当者に対して、子どもたちに好きなものを選ぶ楽しみを与えられるよう理解を促し、多様な色のものを手配してもらえるように、団体のホームページや SNS を通じて広く呼びかけを行った。

活動のポイント！

- 固定観念に縛られた男女の色分けの押し付けが発生する可能性があるため、物資調達時に留意してもらうように、関係者へ情報発信する。
- 災害が起きたことで大人も子どもたちも尊厳を失う場面もある。物資を選ぶ楽しみや、自分らしいものを手に入れることがその回復の一助となることを支援者に理解してもらう。
- メディアの協力を得て、「ジェンダーへの理解」の一例として、周知を図る。

参考事例

- [東日本大震災女性支援ネットワーク*『こんな支援が欲しかった！～現場に学ぶ、女性と多様なニーズに配慮した災害支援事例集』](#)

*「東日本大震災女性支援ネットワーク」は2014年に解散。本事例集は「減災と男女共同参画 研修推進センター」が引継。